

TA ボランティアによる学生支援に関する研究

～新たな教育方法の試み～

The study of student support by citizen volunteer

～Trial of new teaching methods～

松山 博光, 町田 章一, 川廷 宗之, 井上 修一, 藤江 慎二

人間関係学部人間福祉学科

キーワード: ティーチング・アシスタント, ボランティア, 大学教育, 生涯教育, 地域貢献

1. 研究の目的

本研究は, 3 年目を迎えた. 本学の教育現場において, 地域社会に暮らす高学歴・高齢者の TA ボランティア (以下 TAV) が様々な専門知識を学びながら学生を支援できるかどうか, これまでに一定の成果を得ることが出来た. 一方, TAV を実践現場に導入するにはまだ課題も残されている.

今年度は, TAV 活動が教育現場へ幅広く実現化するために, これまでの研究成果を踏まえながら, より一層の効果的な実施方法を再度検討する.

2. TA 学生アンケートの枠組みと調査

(1) 研究の目的

本研究は, 一昨年度からの継続研究である. 昨年同様に TAV の活動実態と授業改善, 受講生の満足度の関係性を明確化し, 受講生の授業内容における TAV 活動との満足度等について比較検討する.

(2) 研究の対象と方法

研究対象の概要は, 以下の通りである.

本学で 2010 年度開講した前期 14 科目と後期 10 科目の 24 科目 (前年度は 18 科目) の受講生 (比較文化学部, 社会情報学部, 人間関係学部) であり, TAV (女性 14 名, 男性 6 名) と教員間で受け入れ合意ができた科目の受講生である. TAV は, 受講者数 (100 名当たり約 1 名) に応じて配属 (複数科目有) した.

調査内容は比較検討するために昨年度と同じ授業科目, 学部 (学科・専攻), 学年の他, 次の 5 項目である. ① TAV との関わりの有無と実態 ② TAV による授業の改善点の有無と認識 ③ TAV 導入の満足度 ④ TAV への期待 ⑤ 自由記述.

(3) 結果と考察 (カッコ内は昨年度の数値)

本年度の調査回答は, 欠損値を除いた 2,044 名 (+491) から得られたデータに基づいて分析した.

① 回答者の属性

学部データは紙面の関係で割愛するが, サンプル数では 4 年生と比較文化学部が少なく, 他の学年と学部 (専攻) は漸増している. 今回は導入科目 (18 科目→24 科目) が増えたことから, より効果的なデータを得ることができると考えられる.

表 1 学年の状況

学年	2011 年度	2010 年度
1 年生	1,143 (50.0%)	914 (55.0%)
2 年生	735 (32.2%)	484 (29.1%)
3 年生	361 (15.8%)	217 (13.1%)
4 年生	46 (2.0%)	46 (2.8%)
合計	2,285	1,661

注) 合計は欠損値を除く.

学年の分布は, 全体的に 1 学年に集中している. 昨年, 一昨年に TAV 活動を経験した 2 年生以上の受講者が調査対象となっているため, TAV の有効性がここで追認できると考えられる.

② TAV とのかかわり

受講生と TAV との関わりでは, 「あった」割合が漸減しているが, 総数では漸増しており, 約 3 割の受講生は何らかの関わりがみられた.

表 2 TAV とのかかわり

	2011 年度	2010 年度
あった	730 (29.5%)	554 (31.4%)
なかった	1,743 (70.5%)	1,208 (68.6%)

具体的には, 「挨拶 (395 名)」が最も多く, 次に「体験談 (197 名)」「質問 (115 名)」「私語の注意 (75 名)」「立ち話 (42 名)」の順で挙げている.

③ TAV 導入による授業の改善点

「改善された」(81.7%) が全体の 8 割を上回り, 「改善されない」(18.3%) は 2 割弱であった.

そこで具体的にどのような改善がなされたか複数回答で尋ねたところ「授業中の配布物がスムーズに手元に届いた」が最も多く、以下表 3 の通り。

表 3 TAV 導入による改善された内容

改善された項目	2011 年度	2010 年度
配布物が入手	1,629 (65.0%)	982 (48.6%)
私語が減った	409 (16.3%)	294 (14.5%)
授業の理解が深まった	279 (11.1%)	257 (12.7%)
教員との距離が近くなった	170 (6.8%)	167 (8.3%)
学ぶ姿勢が良くなった	110 (4.4%)	89 (4.4%)
遅刻が減った	53 (2.1%)	76 (3.8%)

④ TAV 導入による授業の改善効果

ここでは、教員と学生にとって望ましい「スムーズな授業運営」や「学べる環境」、「理解できる授業」、「受講者の学ぶ姿勢」の順で前年度と同じ効果を確認できた。

⑤ TAV 導入への満足度

満足度の設問は 5 点法で尋ね、TAV を導入して良かった場合を 5、その反対を 1 とした。

そこで、満足度を尋ねたところ、表 4 の通り、「5. よかったと思う」「4. どちらかといえばよかったとそう思う」を合わせた 70.4% (前年比 + 6.9 ポイント) が導入に対して高い満足度を示していた。

表 4 TAV の満足度

	2011 年度	2010 年度
5. よかったと思う	1,071 (42.8%)	569 (35.1%)
4. どちらかといえばよかったと思う	655 (27.6%)	481 (28.4%)

⑥ 今後の導入に関する期待

今後の TAV 導入の期待に対しては表 5 の通り。「5. そう思う」「4. どちらかといえばそう思う」7 割を超える回答が寄せられた。2 年間を通した満足度の結果と併せて考えれば、講義の TAV 効果はかなり大きい。学生の回答から TAV の有効性が十分理解できる。

表 5 今後の TAV 導入

	2011 年度	2010 年度
5. そう思う	1,080 (45.3%)	579 (34.0%)
4. どちらかといえば思う	616 (25.9%)	443 (26.0%)

3. TAV からの意見

紙幅の関係で全て掲載することは出来ないが、前期・後期講義終了後の懇談会とアンケートからまとめてみると、① TAV 活動を通して学ぶことの大切さに気づいた。② 若い世代の姿に触れることが出来た。③ 学ぶことや学生支援だけでは、物足りなさを感じた。④ 全員ではないが、マナー(遅刻・化粧・携帯・私語など)の悪い一部の学生がそのまま社会に出て行くことが気になる。⑤ TAV の横のつながりが欲しい。⑥ 図書館や学食を利用したい。などが挙げられた。

4. TAV 活動を受け入れた教員からの意見

受け入れた教員からは「これまでにない静かな学習環境ができた」、「TAV の方がいるだけで学生たちは意識して授業に望んでいる面がみられ、効果的な活動」、「多人数の学生にとって、教員側の目がたくさんあることは有意義である。今後きめ細かい対応を期待する」等が寄せられた。

5. 結語

以上の調査結果をみれば分かるように、TAV の講義への導入は高い成果が得られている。

しかしながら、TAV への不満や期待しない約 3 割の受講者への活動内容の検討も求められている。次年度は、残された大きな課題である TAV と科目(教員)とのマッチングがある。各講義に参加する TAV の豊富な社会経験を生かせるような学生支援のあり方(科目調整: TAV は学生支援として何が出来るか、教員は何を TAV に求めているか)が必要である。

以上のように、本研究による TAV 活動は、TAV・学生・教員から一定の評価が得られた。

しかし次年度(2012 年度継続研究)の準備段階で様々な事由により TAV (6 名)の辞退者があった。今後継続研究を実施することも重要であるが、本格的な導入の検討は、残された課題を次年度の研究課題として本研究の到達点としたい。

【文献リスト】

- 『平成 22 年度 大妻女子大学人間生活文化研究所指定研究: 高学歴・高齢者の TA ボランティアによる学生支援の可能性に関する研究報告書第 2 集』大妻女子大学・人間文化研究所
- 小笠原正明・西森敏之・瀬名波栄潤編『TA 実践ガイドブック』(2006 年 玉川大学出版部)
- 北野秋雄編著『日本のティーチング・アシスタント制度』(2006 年 東信堂)